

イヴァン・イリッチの脱「開発」の提起をいま一度考える

— Ivan Illich, 'Peace is a Way of Life', "Resurgence"

No.88 September/October 1981 を中心に —

平井 朗

- (邦訳書籍) 「暴力としての開発」大西仁訳、『暴力と平和』
坂本義和編、朝日新聞社、1982.2
「平和とは人間の生き方」、『シャドウ・ワーク』
玉野井芳郎・栗原彬訳、岩波書店、1982.9
「平和の根源的意味を考える」、『人類の希望』
イリイチ・フォーラム編、新評論、1981.5
『『平和』と『開発』を切り離せ』
河合伸訳、『朝日ジャーナル』1981.2.27、朝日新聞社

はじめに

イヴァン・イリッチ¹⁾ といえは1971年の *Deschooling Society*, (『脱学校の社会』東京創元社、1977) 以来、*Energy and Equity*, 1974 (『エネルギーと公正』晶文社、1979)、*Medical Nemesis*, 1976 (『脱病院化社会—医療の限界』晶文社、1979)、*Disabling Professions*, 1977 (『専門家時代の幻想』新評論、1984) などの著作を通して「産業的に制度化された市場社会の生産と生活の様式に基礎づけられた異常な科学技術の進歩」(玉野井芳郎『シャドウ・ワーク』解説) に問題を見出し、「schooling (学校化)」「acceleration (加速化)」「medicalization (医療化)」と、そのような「市場を媒介に産業的な制度化をひたすら推進する「専門家的権力」(professional powers)」のシステムを批判してきた。

60年代後半から政治や社会のあり方をラジカルに問う運動が、欧米や日本など工業国家諸国で同時に高まった。全共闘運動など学生の闘い、またヴェトナム戦争を背景とする沖縄の軍事化強化に反対する沖縄返還闘争の高揚など反戦・政治の闘いが高揚した時期であったが、一方で水俣など深刻な公害問題の多発と反対闘争の激化、さらにジェンダー論に至るフェミニズム運動の高まり、のような人類の存在、人間のあり方そのものを根源的に問う運動が同時多発的に進行していた。このような時代を背景として、日本でもイリッチの産業化(近代化)社会批判が大いに注目を集めた。1980年12月、来日したイリッチは一ヶ月余りの滞在中に各地で講演を行い、聴衆にさらに大きな衝撃を与えた²⁾。

しかし80年代後半以降、主としてフェミニズムの側からのイリッチのジェンダー論批判が展開され、彼の名の輝きも次第に色あせていった。21世紀を迎えた現在、イリッチの名前が日本で聞かれる機会は非常に少なく、その著作も一部のものが教育界や医療の世界で読み継がれてはいるものの、彼の思想が日本に紹介された当時に比べれば、それが論壇の思潮に与える影響も格段に減少したようである。とはいえ、イリッチが批判した産業化社会は、ソ連邦の崩壊と冷戦の終結から一段と力を増した経済のグローバル化=資本主義世界システムへの統合の道をひた走っている。開発主義がますます根強く、「経済開発=進歩・発展(はなはだしくは平和)と捉える考え方³⁾」が蔓延っている現在、「開発」と「平和」の関係を初めて明言した 'Peace is a Way of Life' を中心に、所収する『シャドウ・ワーク』等の著作をあらためて書評し、イリッチの問題提起の今日的意義を見極めたい。

1. 「開発」と「平和」を切り離せ、とは

1980年12月、横浜において国際平和研究学会（IPRA）などが主催し、南北両方を含めた世界各地の平和研究者を集め、アジア平和研究国際会議が行われた。「会議の主題は『軍事化と軍縮』『低開発と既成開発戦略に代わる道』『価値観の変革と新たな文化的アイデンティティの創造』という三つの大きな柱からなっていたが、その主眼は、直接的・構造的暴力を克服する平和の条件を、世界的視野に立ちつつ、アジアに焦点をしばって究明することにあった⁴⁾」

本稿のテキストは、その会議のために用意された6人の基調報告のなかの一つである。イリッチは、後に『シャドウ・ワーク⁵⁾』として編纂される「シャドウ・ワーク」「ヴァナキュラーの価値」「民衆による科学」等の論文を携えて来たが、この講演では、これらの中に示された「開発」「ヴァナキュラーな領域」「サブシステム」「シャドウ・ワーク」「ジェンダー」などへのイリッチの視座がコンパクトに語られている。70年代の第三世界「開発」下で南北格差がかえって増大する中、従来の「開発」理論への様々な批判が論じられた1980年前後、まさに時宜を得た講演だったと考えられる。結果として、日本国内で4種の翻訳が三つの出版社から出版されるほど、高い支持を得たのである。

刊行された順序に沿って各テキストを紹介する。最初に公刊されたのは河合伸訳「『平和』と『開発』を切り離せ」（『朝日ジャーナル』1981年2月所収）である。横浜の講演と同内容の講演を沖縄で行ったものの記録が「平和の根源的意味を考える」（『人類の希望』1981年5月所収）である。これらの講演をのちに部分的に改稿して、英国の隔月刊誌“*Resurgence*”（1981年9-10月88号）に発表した‘*Peace is a Way of Life*’を基に『朝日ジャーナル』の訳を参照し大西仁氏が翻訳したのが「暴力としての開発」（『暴力と平和』1982年2月所収）、やはり“*Resurgence*”所収論文を基に玉野井芳郎氏が翻訳したものが「平和とは人間の生き方」（『シャドウ・ワーク』1982年9月所収）である。

今回は、イリッチ本人が筆を入れた改訂版であることをもって“*Resurgence*”版の‘*Peace is a Way of Life*’を基本テキストとする。しかしこれが横浜、沖縄での講演と大きく異なるのは、末尾の結語の部分である。イリッチが「民衆の平和」に対峙するとする「パックス・エコノミカ」に対する挑戦に関する表現、特にその挑戦の主体と方法、誰がどのように挑戦するのかの記述が“*Resurgence*”では割愛されている。この点に関して邦訳各テキストを比較すると、『朝日ジャーナル』『暴力と平和』『シャドウ・ワーク』の各書は、“*Resurgence*”で割愛されている部分を講演に従って復活し、他方『人類の希望』は“*Resurgence*”とほぼ全く同じ内容・末尾である。

またイリッチの英文原稿には、イリッチ独特の特殊な用語が多く、訳者によって相当な表現のばらつきがある。例えば *people's peace* の訳が『暴力と平和』『シャドウ・ワーク』の「民衆の平和」、『人類の希望』の「ピープルの平和」、『朝日ジャーナル』の「大衆の平和」といった違いである。また、全般的に『人類の希望』『シャドウ・ワーク』の訳はほぼ“*Resurgence*”の原文に忠実な表現即ち直訳調で、時として日本語として理解し難い場合があるのに対して、『朝日ジャーナル』『暴力と平和』の訳は相当な意識が行なわれている。

次にこの論文（講演）の概要は以下の通りである。尚、“*Resurgence*”掲載の原文には節ごとのタイトルがなく、構成の流れを掴むのに不便であるので「平和の根源的意味を考える」（『人類の希望』所収）の節の分け方を参照した。

イリッチはまず導入として、平和という言葉は時代、文化圏によって異なる意味を持つと述べ、更に各文化圏の周縁部（＝民衆）の平和は「開発」によって失われたと述べる。

(1) 平和の多様な意味

イリッチは平和の多様性を、いわゆる文化圏よりさらに狭い地域、共通する文化をもった共同体に依拠するもの、即ち「平和は話し言葉と同様にヴァナキュラー⁶⁾なもの」と指摘する。戦争は文化を単一化さ

せ、平和はそれぞれの文化をそれぞれに花咲かせる。

だから平和は輸出できない。平和の輸出とは戦争だ。平和と平和研究は、その民族一人類学的現実に基づかなくてはならない。

(2) 戦争の歴史を越えて

かつて領主たちの戦争はサブシステンス⁷⁾文化 (subsistence cultures) の存続に依拠し、民衆の平和が継続することによってこそ継続できたので、戦争は平和を全面的に破壊できなかった。しかしその事実は見落とされ、歴史は往々にして戦争の物語として語られた。民衆の文化の新しい歴史も、貧しい者の平和よりむしろ暴力に焦点を置きがち。

戦争の物語より「はるかに多様な平和の歴史」への渴望がある。

(3) 経済のパワー（権力、勢力、さらに国家）の均衡である平和

中世以降の欧州の歴史で「経済の稀少性の前提」の拡大が民衆の平和を追いやった。経済のパワー間の均衡＝「パックス・エコノミカ」が平和の意味を独占し、世界的に受け入れられた最初の「平和」となった。私（イリッチ）は「パックス・エコノミカ」の反対であり補足物でもある民衆の平和とを比較対照したい。

(4) 現代のパックス・エコノミカの出現

1949年1月10日、トルーマンのポイント・フォー計画で「開発」の新しい意味が誕生した。「開発」は民衆、国家、経済戦略に言及できるようになった。

「開発」理論は二つの波、東西両陣営それぞれの「開発」主義の奔流となった。両者とも経済成長を重視、生産と消費への依存を増加させ、世界中への「開発」の普及を競った。

(5) 開発と平和の連結

「平和」は「開発」によって実現されると考えられるようになった。「開発」に反対する者は、ガンジーですら「平和」の敵とされた。「開発」と結びついた「平和」が台頭。

しかし70年代になって「開発」による環境への暴力的侵略は、「パックス・エコノミカ」によって覆い隠されたサブシステンスへの暴力であることが明らかになった。つまり「開発」とは暴力であり、平和研究の主要な課題である。

(6) サブシステンスに対する戦争

「開発」によってサブシステンス志向の文化の領域から、ゼロサムゲームの経済領域が「離床」し、一つの経済システムへ統合される。「開発」はサブシステンス活動を捨てさせ、ゼロサムゲームへの参加を強いる「パックス・エコノミカ」を押し付ける。

過去に戻ることを提唱するのではないが、ヨーロッパ中世に「パックス・エコノミカ」に対立する民衆の平和を見ることが出来る。ヨーロッパの中世の終わり頃から「パックス・エコノミカ」はその暴力的な形を呈したのだ。

(7) 中世の平和

12世紀に平和とは領主たちの停戦ではなく、むしろその戦争を支えるために必要な貧民のサブシステンスを戦争の暴力から守ること、「領域の平和」を意味した。

このサブシステンス志向の平和の意味は、ルネッサンスと共に失われた。

(8) パックス・エコノミカの暴力

国民国家の台頭によって、サブシステムそのものがいわゆる平和的侵略の犠牲になった。即ち、サブシステムはサービスと財による市場拡大の餌食となり、「新しい平和」は多様な地域性、多様な文化、多様な環境を持った共同体を破壊して、人々を均一な「ホモ・エコノミクス」へ変えた。その暴力は以下の三点である。

- ① 制度依存・商品依存による人々の無力化
- ② 環境の資源化・商品化

(9) 〈男と女〉と平和(シャドウ・ワーク⁸⁾)

③ 男女間の全面戦争

産業化以前の社会では、サブシステムに関するすべての仕事がジェンダーによって割り振られ、男女が競争することなく「大人になる」文化であった。

「パックス・エコノミカ」の下での産業的労働(ペイド、アンペイドとも)はジェンダーレスである。しかし、高賃金の労働には先ず男がつき、女は残された低賃金労働か無給(アンペイド)のシャドウ・ワークにつくことを強いられる。

「労働のこの中性化の結果として、開発は必然的に両性間の新種の戦争を促進します」

(10) 平和と開発とを切り離す

「パックス・エコノミカ」はゼロサムゲームのルールに従えない者は「平和の敵」として追放または「教育」する。環境と労働(稀少性)の奪い合いのゲーム。「開発」とはこのゼロサムゲームを拡大することである。

しかし「パックス・エコノミカ」にも若干の肯定的価値がある。産業革命以降の工業製品は以前の農産品の市場とは異なる市場で流通せざるを得ないし、経済のパワー間の平和は、少なくとも古代の領主間の平和と同程度に重要である。

エリート平和の独占への挑戦の定式化が、今日の平和研究の最も基本的な責務なのだ。

“Resurgence”の英文テキストはここが文末となっているが、講演ではこの後に件の「パックス・エコノミカ」に対する挑戦の主体と方法、誰がどのように挑戦するのかが記述される。また講演では、「パックス・エコノミカの若干の肯定的価値」を異なった表現で述べている。この部分は短い重要な意味を含んでいるので後述(最終節)する。

2. 平和とは何か

語るべき平和とは一体何なのか、“Peace is a Way of Life”の初めの部分でイリッチは、「パックス・ロマーナ」が平和の概念を侵略し統一していった西欧と、多様な平和観を言語に内包する極東とを対置させつつ、文化による平和の相違と歴史的変遷を語り、平和研究が「パックス」に囚われる危険について紙数を割いて述べている。平和はそれぞれの文化が独自の方法で花咲く状態であるのに対して、戦争は文化をよく似させてしまう。だから平和は輸出できないどころか平和の輸出とは戦争であると強調する。

イリッチは、平和を民族・文化・歴史に基づかない「抽象観念」とするなら、平和を現実化することはできないと言う。しかし、それ故に、平和とは何か、何を実現することが平和の実現なのか。イリッチは定義しない。文化の画一化である戦争から多様な平和への渴望を語るのみである。イリッチは「平和」や「民衆」を学界で定義されるようなものとしてではなく、「中央から流れる画一的文化の一方的享受をやめて、それに代わるもうひとつの自分たちの地域文化を具体的に対置させてゆく運動」、「少数者の、無限の可能性をもつさまざまな形の非暴力の運動⁹⁾」が80年当時の原発反対運動のように「ヨーロッパをはじ

め世界の多くの地域でうねるように起きていること」の中に現実化するべきものと考えたのではないか。「民衆の平和」の民衆とは抽象的な「民衆」ではなく、地域の文化を担い、独自性のある平和を作りだす地域の住民、そこにダイナミックに生きる民衆を指すのである。

皮肉なことに、平和から文化的・歴史的コンポーネントが取り除かれ、稀少性の原則の下での経済のパワー間の均衡といったものに変えられてしまったことが平和研究を学問として成り立たせた。換言すればゼロサムゲームのプレイヤー間の均衡＝「ボックス・エコノミカ」が新しい「平和」となってしまった。この「ボックス・エコノミカ」と民衆の平和とは正反対に対立かつ補完し合うものであるという。

ヨーロッパ中世史を専門の一つとするイリッチは、この「ボックス・エコノミカ」の成立をヨーロッパ中世の終り頃であると主張する。中世までの社会では、領主間の戦争ですら領民たちのサブシステムに依存していた。平和とは、人々がサブシステムを得る水、牧草地、森、家畜へのアクセスを守ることだったが、このサブシステム志向の平和はルネッサンス到来と共に失われた。以降、講演の5パラグラフが英文テキストでは1パラグラフに要約されているため、中世の後突然、国民国家創設の時代へ話題が飛んでいるが、要するに、資本主義の発生と共に登場したまったく新しい平和と暴力¹⁰⁾が語られている。本来ヴァナキュラーであったはずの活動は次第に市場価値に交換されるようになり、サブシステムそのものが市場拡大の餌食となったのだ。

結局、新しい平和、「ボックス・エコノミカ」とは経済のパワー（権力、勢力）間の均衡、即ち現代の国民国家間の平和＝国際平和である。まさにグローバリゼーションの進展する現在、そこでは稀少性の原則に基づく市場経済という価値観にすべての人間が一元化されることが強制されている。イリッチがヴァナキュラーという言葉を使って主張している「民衆の平和」とは、地域や地域の文化に根ざした民衆が「ボックス・エコノミカ」から取り返そうとしているサブシステム志向の地域の平和をいうのである。

3. 「開発」と環境

1949年1月10日、トルーマン合州国大統領は年頭教書演説で「ポイント・フォー計画」を発表した。この時、現在我々が使用する意味での「開発 (development)」という言葉がこの世界に初めて登場した。「開発」は東西冷戦を背景に「低開発」地域の共産化を阻止し、「米国民間資本が米国の技術の力で世界の植民地地域の非帝国主義的企業に投資する¹¹⁾」意図で始められた。

イリッチは西暦800年から1200年の間、ヨーロッパにおいて生きるために必要不可欠な母なる教会という至上の組織・制度が広まり、「異教徒」という概念が作り上げられたという。「異教徒」とはインサイダーがその中に引き込まなくてはならないアウトサイダーであり、5回ないし6回の変異の末、現在に至るとする。第一にローマ人にとっての異邦人が異教徒とみなされ、第二にヨーロッパ中にキリスト教が広まった8世紀には、イスラム教を信じるものは非キリスト教徒、不信心者と呼ばれ、ヨーロッパはこれらの不信心者を改宗させる権利と義務を持っていた。第三に14世紀には未開の人間という空想が生まれ、第四に「土着民」という言葉がこれにとって代わった。「土着民」は「異教徒」の四代目で「土着民」は漸次、文明のレベルまで引き上げなくてはならないという考え方がある。そしてさらに1949年に「土着民」は新しい名称を持った。土着でありながらインサイダーになりたい——低開発 (under developed) の状態にある地域の人という概念で、トルーマンがこの新しい言葉を世に送り出した。この考え方から出発して、人間には実体がない、故に媒介を通して精神的な恵みを受ける必要がある。しかも世界中で共通で、平等なものでなくてはならないという思想に発展した。それが稀少性の歴史へと導いていった。稀少性という考えが作り上げられたという¹²⁾。「開発」は民衆のサブシステム志向の活動や文化を破壊し、人々を市場に依存せざるを得ない状態に貶める。一つの経済システムへの統合、「ボックス・エコノミカ」の拡大である。

当時の東西両陣営に共通して「開発」は「経済成長を中心とする平和 (ボックス・エコノミカ)」に結び

ついた(近代主義に裏打ちされたパラダイムもしくは)「教義」として世界に布教¹³⁾すべきものであり、「開発」に反対する者は例えガンジーであっても「平和の敵」とされた。したがって異議申し立ては非常に困難であると思われたが、1970年代に入って、それまで単に「開発のための資源」と考えられてきた環境が破壊されたために、「ボックス・エコノミカ」とそれを拡大する「開発」が人々のサブシステム、生存そのものに対する暴力であることが突然表面化したのである。

イリッチ自身は日本のイリッチ研究者と異なり構造的暴力という言葉は使わない。しかし「ボックス・エコノミカ」を、民衆の文化への暴力、共有地(コモンズ)～環境への暴力、女性たちへの暴力の三種の暴力を保障するものであると主張している。

イリッチの「開発」に対する根底的な批判はアジア平和研究国際会議に於いても真剣に受け止められた。しかし半面、「アジアの途上国で実際の平和運動にもたずさわっている平和研究者の中からは、イリッチ氏の報告に対して強い反発が寄せられた¹⁴⁾」という。イリッチは現在の「開発途上地域」にまだ残る互酬的な人間と人間の、また自然と人間の関係を保つために「開発」という外からの干渉を排除し、平和な状態に置いておくことを主張したが、飢餓と貧困からの脱出を望む人々の「内発的開発」をも否定するのか、もしそうとしても「開発」に代わる具体策を何ら提示していないという反問である。

イリッチは質問に対して沈黙を守った。大西仁は、イリッチがそれはアジアの人々が自発的努力によって見つけるべきで、そこで答えることも一種の「暴力」であると考え、また現実に行われている多くの活動の中に既に望ましい営みを見出していたのではないかと推測している。しかし『脱学校の社会』においてイリッチは、「開発」は「貧困の近代化¹⁵⁾」を作りだすものであっても、貧困を解決するものではないと主張している。つまり例えばラミスのように「経済発展は貧困の差をなくすことではなくて、貧困を利益がとれる形に作り直す、「貧困の合理化」なのです、「貧富の差は経済活動で直るものではない。…政治活動、つまり、議論して政策を決め、それをなくすように社会や経済の構造を変えなければならない¹⁶⁾」と答えることもできたのではないかと推測している。しかしなお多くの人々が「私たちは貧乏にならないのか、これは新しい禁欲主義なのか¹⁷⁾」と不安を感じている。

「ボックス・エコノミカ」は、民衆のサブシステム能力を経済のゼロサムゲームに適さないものとして奪い取り(生産手段=土地を「囲い込み」で奪い)、生産を増加し、あらゆる財やサービスを市場に依存しなければ生きられない(賃労働で収入を得るしかない)消費者に貶めた。過度の商品の集約が社会の持続性を破壊することに対してイリッチは人々が「プラグを抜く(unplugging)¹⁸⁾」ことを主張している。南も北も関係なく、市場に掠め取られたサブシステムを「享楽主義」をもって取り戻すこと¹⁹⁾と共に、現在の「グリーン電力」のような商品の集約度の低い²⁰⁾ライフスタイル(生産力増強への協力を拒否するし、消費(の権利)自体も放棄する)が、20年前のイリッチによって見事に具体的に捉えられていたことに驚かされる。

「ボックス・エコノミカ」の環境への暴力。それは民衆がサブシステムのために利用してきた共有地、環境を「囲い込み」、「稀少な資源」として利用するために民衆のアクセスを排除するという「開発」を行った。『コンヴィヴィアリティのための道具²¹⁾』でイリッチは30年前に今日の地球環境問題の登場を的確に予見している。第三章 *Multiple Balance* (多元的な均衡) では、*Biological Degradation* (生物学的退化の脅威)として、人口問題、エネルギー問題など環境危機を定式化し、さらに、新技術を開発したものによって社会環境そのものをその技術なしには生きてゆけないように歪曲する暴力である *Radical Monopoly* (根源的独占)の脅威と、次々登場する新製品を持たない人間は社会的地位が低いと思わせる *Obsolescence* (廃用化)の脅威を示し、さらにこれらのために人間社会は消費水準格差が権力の格差を生む *Polarization* (分極化)の脅威に直面し、「貧困の近代化」が起っているという卓見が示されているのがその根拠である。短期間にマイナーチェンジされる新製品を次々に消費することが経済発展であり、人間の幸福だとした高度経済成長の破綻は地球環境危機によって決定的に明らかになったのだが、第一次石油ショックの起った1973年既にイリッチがこの貧困の近代化を体系的に予見していたことは驚嘆に値

する。

4. ヴァナキュラー、ジェンダー、シャドウ・ワーク

イリッチの著作を大きく特徴付け、また理解を困難にもさせているのは、彼のヨーロッパ中世史の研究成果に基づく「ヴァナキュラー」、「ジェンダー」のような独特な用語である。これらの言葉は単なる難解な用語(term)ではなく、イリッチ思想の根幹をなしている。一方で、それ故にさまざまな批判を招いているのも事実である。イリッチは民衆の平和を語る時、「パックス・エコノミカ」が確立する前の中世の平和について多くの言を費やす。もちろんイリッチ自身は、本テキストに於いても過去への回帰を支持するのではなく、「パックス・エコノミカ」と民衆の平和の対立を例証するために過去を考察するのであり、また存在しないユートピアを夢想する社会科学理論より過去を探求するのだと主張している。しかしそれでもなお、「中世の領主間の血なまぐさい戦争ですら、環境の使用化価値を守ったとイリッチが主張するとき、兵士として、または徴発、収奪、犠牲の対象になっていた中世民衆の生命と、環境の使用化価値の重点のおき方が逆転しているのではないか²²⁾」のように、イリッチが中世を余りに理想化しているという数多くの批判がなされた。

例えば、イリッチの描くヴァナキュラーな社会、「産業化以前の社会が、女たちにとって今より生きやすい社会であったとは思えないし、また男女が平等であったとも思えない。自然と伝統とに支配され、女たちは(女たちだけがというわけではないが)、重労働と飢えと貧困と、共同体による規範の強制とに、苦しめられていたにちがいない。現代産業社会におけるのとは異なる仕方、前産業社会における女たちは、それぞれに抑圧されていた²³⁾」という批判がある。これを進歩主義、近代主義であると反批判するのは簡単であるが、やはりイリッチの中で、中世においてももちろん存在していた家父長制、奴隷制のような「社会関係の垂直性の視点は後退している²⁴⁾」のではないか。

さらにイリッチによれば、産業化社会の成立と共に労働の中性化が起り、ジェンダー²⁵⁾が破壊されてセクシズムが始まったという。萩原弘子はこの労働中性化論を、女が男より低賃金である論理的説明ができないことを中心に批判²⁶⁾する。中世には、それぞれのジェンダーによって割り振られた、どちらが上でも下でもないサブシステムを維持する仕事をこなして平和のうちに過ごしていたはずの男女が、「ジェンダーレスな」「中性的な」「中立的な」労働を前にして男が上位に立ち、女がハンディキャップを負わされることによって両性間の不毛な戦争が起ったというのだが、そもそもなぜ「男が上位に立ち、女がハンディキャップを負わされる」ようになったのか、その理由についてイリッチの説明はない。

イリッチは「プラグを抜く」生活スタイルを提唱している。そして性差別の克服は経済的縮小という代価を払う以外にない、と断言する。しかし「彼の思想には理想はあるが、日本の現実からは余りに遠い。なぜなら男女の実質的平等さえ実現できない日本社会が、どうして自ら経済縮小への道を選択するだろうか²⁷⁾」「両性間の経済的平等をめざせない社会は、本質的に経済縮小もめざせない社会であることを、雇傭平等法の今日的な問題を通して改めて思い知らされている²⁸⁾」という運動の現場の苦渋に対してイリッチはどう答えるのだろうか。

イリッチは女が家庭に困り込まれ、シャドウ・ワークに従事することは、賃労働が成立するために必要な性的アパルトヘイトであったと言う。進歩主義者が言うところの因習や家父長的支配に隷属させられる農村共同体からの人間の解放も、実は市場に向っての解放、競争原理への隷属に過ぎないと考えるのだ。一方で、人間を消費者に貶める「パックス・エコノミカ」ではさまざまな生産を増大させる私的な消費もシャドウ・ワークであり、このような市場依存に根底的に対抗する生活価値がヴァナキュラーな価値なのだ。

やはり、イリッチの言う「ヴァナキュラーな価値」は中世のような生活に戻るものの中にあるのではなく、宇沢弘文との対談でイリッチが述べているように現実の産業社会の中で「unplugging(プラグを抜く)―

ドロップ・アウト（落ちこぼれる）ではなく一進歩しつつ、『アンブラグする』²⁹⁾」こと、便利さや快適さと共に葉漬け石油漬けになっている生活を内側から乗り越えること、「快」を増やすことに埋没している自分自身を相対的に捉えなおすことの主張なのではないだろうか。

おわりに

本稿第1節の末尾で述べた、テキストによる結論部分の違いであるが、講演では、(a) パックス・エコノミカに対する挑戦は、過去への回帰やユートピアへの飛躍を意味するものではなく、「開発」の暴力を相殺する平和と、新しいバランスを作り出す枠組みを捜し求めることであるとされる。さらに (b) 「産業革命はすでに現実のものであり、ボールベアリングも発電機もコンピューターのマイクロ処理装置も、われわれには必要なものである…(後略)³⁰⁾」として、現代のテクノロジーやそれを産み出す仕組みであるパックス・エコノミカも、現代民衆のサブシステムに役立てられ、サブシステム志向の生活の平等な希求を保証する側面があると述べている。恐らくイリッチはここで『コンヴィヴィアリティのための道具 *Tools for Conviviality* (後述)』を主張したかったのであろう。同書でイリッチは、科学技術そのものを否定するのではなく、その「相反する二つの利用の仕方」を認識せよと述べているのである。

しかし英文テキスト（‘*Resurgence*’）においては、(a) の部分が完全に削除され、(b) の部分は「パックス・エコノミカにも若干の肯定的価値がなくもないことをしぶしぶ認めることはできます—自転車が発明されました、その部品は胡椒が以前売買された市場とは異なった市場で流通されねばなりません。そして経済のパワー間の平和（評者註：パックス・エコノミカ）は、少なくとも古代の領主間の平和と同程度には重要です」と同じ部分の叙述がまったく異なって簡略化されている。講演での表現と比べると、テクノロジーそのものに対しても極めて否定的な印象を受けるし、それまでの文脈と合せるとイリッチの主張が脱「開発」、脱産業化社会にとどまらず、反近代主義、復古主義の文脈に偏って受け取られてしまう可能性が高いだろう。日本から帰った後、イリッチが何故このような改訂を行ったのか、それは不明である。しかしイリッチの本意は「今日の平和とは何か。私達のような、物はより少ない方がいいと考えている人間は、技術をより価値のある方法で用いることを主張したい。経済成長というひとつのケーキを平等に分け合うのが、権利の平等だという考えの、まったく逆なのです³¹⁾」という本人の言葉に明らかなのではないだろうか。

最後のパラグラフ即ち、パックス・エコノミカに挑戦する主体は、このパックスに耐え切れないうまに苦しめられた人びと、新しいサブシステムの増大以外にもはや希望がない人びとであると述べた部分は英文テキストで削除されている。ここでは、それぞれの共同社会の平和の主張はそれぞれの社会独自のやり方で明示されるべき、とも明言されているのだが、会議の席上でのアジアからの批判発言を受けて、おそらく出版時に少ない語数ゆえの誤解を避けるためだったのではないだろうか。

ちなみに瑣末なことながら、岩波版『シャドウ・ワーク』の玉野井訳「平和は人間の生き方」では、イリッチから送られてきた“*Resurgence*”掲載の英文原稿に講演末尾の部分を足したといいながら、復活されたのは上記の最終パラグラフだけで、パックス・エコノミカに対する挑戦の意味、及び現代テクノロジーとサブシステムについて述べた部分は英文テキストのままに置かれていることを追記しておく。

実際本稿の執筆を始めた時点では、イリッチを批判的に再評価するといいつつも、評者は相当に懐疑的であった。確かに世界で最も早い時期にイリッチが「開発」が「平和」に結びついた「パックス・エコノミカ」による暴力を指摘したことは知っていたが、その後のフェミニストを中心とした批判を知ったことや、テキストの難解さから、やや後ろに引いていたことは否めない。

しかし、ここまでの論考で明らかなように、イリッチの主張は発表された時点でむしろ20年、30年早過ぎたのかもしれないといえる。公害問題が漸く世間の関心を集め始めた1973年に既に地球環境危機を指摘した『コンヴィヴィアリティのための道具』だが、一方で「世界初のパーソナルコンピュータともい

われる“SOL”(ソル) …を開発したことで知られるリー・フェルゼンシュタイン³²⁾」らに強い影響を与え、『コンヴィヴィアリティのための道具』を現実化するためにパーソナルコンピュータが作られたとも言われる。イリッチは同書のまえがきで「科学上の発見は少なくとも二つの相反する利用の仕方があることを認識するだけでいいのだ。一つのやり方は、機能の専門化と価値の制度化と権力の集中をもたらし、人々を官僚制と機械の付属物に変えてしまう。もう一つのやり方は、それぞれの人間の能力と管理と自発性の範囲を拡大する。そしてその範囲は、他の個人の同じ範囲での機能と自由の要求によってのみ制限されるのだ³³⁾」と述べ、「産業文明が生み出したさまざまな“道具”が、その用いられかたによって二つの相反する結果を、人々に与えると言っている³⁴⁾」のである。

操作者と依存者、生産者と消費者、専門家と市民を分離し、制度化する“操作的な道具(制度化された科学技術)”と、それらに対抗し、それらを解体する“コンヴィヴィアルな道具(民衆の、市民の科学技術)”というテクノロジーの二面性。イリッチ自身、1973年にパソコンやインターネットの現在の可能性を予見していた訳ではないだろうが、「制度化され、人々を操作する道具として用いられている」科学技術と、「学校という装置によってふるいわけられた少数の知識エリートたちが専門家として君臨³⁵⁾」する産業社会を変質させるコンヴィヴィアルな道具という明確な視座が既にあったのだ。つまり、テクノロジーそのものは単なる道具であり、それを「ボックス・エコノミカ」支配の道具に留めるのか、逆にそれを解体する道具とするのかは、「それを使いこなすわれわれの課題である³⁶⁾」。

イリッチの思想は産業社会をその中から乗り越える、人間の自律の思想として受け止められるべきものである。しかし現実の不平等に対する女性の闘いとは距離があるようだ。女性や第三世界の人々の抑圧の上に、あくなき経済拡大と軍備拡張をもくろんでいるような産業社会体制下で「女性が人間という概念を捨てて、ジェンダーのある女として存在したいと考えたとしても、それは男性と女性が究極的には平等であると考えること以上に幻想であるに違いない³⁷⁾」という疑問にイリッチはどう応えるのか。女性の人権要求を容認し得ない社会が「ヴァナキュラーなジェンダー」を容認することはあり得ないのではないか。結局のところイリッチの著作を読んでも、現実社会で抑圧されている女性たちを如何に解放するのかという具体的な道筋が見え難いために、読者が「ヴァナキュラー」のような言葉や中世の共同体イメージの迷宮に囚われ混乱してしまうのだ。いまこそイリッチの思想を深化させ、解放への道筋を明示するという課題が残されているともいえるだろう。

「私は歴史家として、現在、私たちがどこに立っているのか、という重要な問題をできるだけはっきりさせたいと考えているのです³⁸⁾」というイリッチは、一方で、自らアナキストといい、若き日は反ナチのレジスタンス活動、現在は反核、反遺伝子工学の活動に加わり、この40年間以上メキシコに拠点を置き、第三世界の人びとの未来に心をくだき続けている活動家でもある。「あなたが官僚的で機械的な産業社会にラディカルな批判をくわえるとき、ことはまったく圧倒的であるために、結論としては絶望だという読者が多いのではないか」というラミスの問いに「人々にあるのは希望だけだ。だから僕は過去を学んでいる。…(略)…というも僕は、我々が必然だとか必要、務めだと思っている事柄が、実際にはどれほどはかないものかを、他の人たちに分って貰いたいからだ」とイリッチは答えた³⁹⁾。

イヴァン・イリッチは、読めば読むほど多義的な解釈の深みにはまり、かつ常に新しい発見を与えてくれる先進の思想家なのである。

〔注〕

1) イヴァン・イリッチ (Ivan Illich 1926 ~)

※ 名前の日本語表記を「イリッチ」とするか「イリイチ」とするかについて諸説があるが、本稿では単になるべく原音に近づけるという意味で「イヴァン・イリッチ」と表記する。尚、本脚注

の引用元である『イリイチ日本で語る 人類の希望』新評論、1981.5では「イバン・イリイチ」と表記している。

1926年、オーストリア・ウィーン生まれ。30年代にイタリアに移り、フローレンスの大学で自然科学を学び、ローマのグレゴリアン大学で神学と哲学の修士、ザルツブルグ大学で歴史の学位を得た。哲学と語学(10数か国語ができる)の才能を認められて、ヴァチカンの渉外部に入るが、それを辞してニューヨークのアイランド系移民の小教区(プエルトリコ人地区でもある)の助任司祭となる。

1956年、プエルトリコのカトリック大学の副学長となるが、深刻な教育問題にぶつかり辞職、一時ニューヨークに戻るが、その後メキシコのクエルナバカに移住した。そこで彼は、メンデス・アルセオ司教の協力を得て1961年「国際文化形成センター(CIF)」を創設。1967年に「国際文化資料センター(CIDOC)」に改組、アメリカ合衆国を盟主とする「進歩のための同盟」とヴァチカンのラテン・アメリカ政策を批判するが、1968年にヴァチカンによって宗教裁判に近い訊問をうけ、僧職を離れる。CIDOCは1976年4月に閉鎖され…(『人類の希望』)

※ 80年代からは、メキシコ、米国、ドイツを行き来する生活を続けている。現在はペンシルヴァニア州立大学客員教授(科学技術社会の哲学)の他、プレーメン大学などで教職。(ペンシルヴァニア州立大学哲学科ウェブサイト中「イヴァン・イリッチのプロフィール」ページ <http://philosophy.la.psu.edu/illich/profile.html> より抜粋翻訳)

- 2) 「発展」に依拠した経済協定は戦争を必然的にネガに含むものであって、民衆文化の平和とは根底から異なる、と歴史を自ら語りながらダイナミックに展開、会場はあっけにとられた。誰一人考えたこともない、まったく固有の思想がファンダメンタルに明示されたためである。(山本哲士「イリイチ思想の新しい地平」『技術と人間』1981年2月号、65頁)
- 3) 郭洋春「冷戦構造の本質と世界経済」横山正樹・涌井秀行共編『ポスト冷戦とアジア』中央経済社、1996年、3頁
- 4) 坂本義和「まえがき」坂本義和編『暴力と平和』朝日新聞社、1982年、v頁。同書は、アジア平和研究国際会議の全貌を記録したものである。
- 5) 同書の日本語版のみの冒頭に、本テキストの講演が「平和とは人間の生き方」として所収。
- 6) 「【ラテン語「家で生まれた奴隷」の意から】(形容詞) 1. <言葉が>その国〔地方、土地〕の…(略)… 2. <建築・工芸など>その土地特有の、…(略)… (名詞) 自国語、土地言葉、…」『新英和中辞典〔第5版〕』研究社、1995年
イリッチは「ヴァナキュラーというのは、“根づいていること”と“居住”を意味するインドーゲルマン語系のことばに由来する。ラテン語としてのvernaculumは、家で育て、家で紡いだ、自家産、自家製のもののすべてにかんして使用されたのであり、交換形式によって入手したものと対立する」(『ヴァナキュラーな価値』『シャドウ・ワーク』岩波書店、1982年、118頁)と自立的、非市場の立場を表す「交換という考えに動機づけられていない場合の人間活動を示す簡単で率直なことば」として使用している。
- 7) 「(名詞) 1. (収入・食糧不足の時の)生存 2. (ぎりぎりの)生活、生計」『新英和中辞典〔第5版〕』研究社、1995年
イリッチの師事したカール・ポランニーが、地域コミュニティの人間社会から市場経済として離床(disembed)した経済を、社会の中へ再び埋め込む(reembed)理念として使用した言葉である。イリッチは、市場経済に依存する生活に対して、自然環境に依存する民衆の自律協働的な生活をサブシステムという。サブシステムが英語の用法から「ぎりぎりの生存、賃金」と誤解されることを嫌ったイリッチは「公的選択の三つの次元」ではヴァナキュラーの使用を提唱したが、この論文

- だけでは「ヴァナキュラーな価値」も読者の熟知が期待できないと、論文「シャドウ・ワーク」では「サブシステム」に固執した。賃労働、シャドウ・ワークの対立概念である。
- 8) 支払われない労働 (unpaid work) である。ただしサブシステム活動としてのアンペイドワークではなく、賃労働を補完するアンペイドワークのこと。大部分の家事労働をはじめ、押し付けられた試験勉強や消費のストレスまで、人間生活のサブシステムを奪い、産業-消費経済を支えるものであり、またそれがあることが(賃労働の)賃金が支払われてゆく条件でもある。
 - 9) 玉野井芳郎「民衆が創造する平和」イリイチ・フォーラム編『人類の希望』新評論、1981年、139頁
 - 10) イリッチは人間の暮らしが「サブシステムの経済」から「稀少性の経済」へと転換する過程を問題にする。「私は特に二つの時代に興味をもっています。12世紀の半ばと19世紀前半です。そしてこの二つの時代において、『稀少性』がどういうものであったか、という疑問に取り組むならば、経済学の根拠を解明する手がかりになるかもしれないと思っています。…(中略)…19世紀…『これが必要だから、作ろうとか、しようとか、手に入れよう』というのではなく『他人がこれを欲しがっているから、私も欲しい』という様に変容した。同じものを願望することにより、願望の対象になったものには稀少価値が発生する。この発見は私にとっても驚きでした」イヴァン・イリッチ、宇沢弘文対談「プラグを抜く」『世界』1981年4月号、148頁
 - 11) 郭洋春「冷戦構造の本質と世界経済」横山正樹・涌井秀行共編『ポスト冷戦とアジア』中央経済社、1996年、4頁
 - 12) イヴァン・イリッチ、宇沢弘文対談「プラグを抜く」『世界』1981年4月号、148頁
 - 13) 「トルーマンはポイント・フォーの下で外国へ送った専門家を『技術宣教師』(technical missionaries)と呼んだ」C. Douglas Lummis, "Development is Anti-Democratic", 'Kasalinlan', Vol.6, No.3, 1st Quarter 1991, p.43
 - 14) 会議のやり取りの経緯は、大西仁「平和研究に対する新しい課題」『朝日ジャーナル』1981年2月27日号、29頁による。
 - 15) イヴァン・イリッチ『脱学校の社会』東京創元社、1977年、16頁
 - 16) C・ダグラス・ラミス『経済成長がなければ私たちは豊かになれないのだろうか』平凡社、2000年、122-124頁
 - 17) 同上書、142頁
 - 18) イヴァン・イリッチ、宇沢弘文対談「プラグを抜く」『世界』1981年4月号、149頁
「この人は、シカゴの小さなコミュニティに属し、その屋根の上には風車がついていて、これで発電が行われていました。ところが、次第に、電器の回路に、電力をフィードバックするようになり、あるとき、逆方向に送電が起きました。電力会社はこの問題を法廷で争い『逆方向に送電する権利はない』と主張しました。…(中略)…友人は次のように主張しました。『私は、生産と消費からプラグを抜く。私は生産を拒否する。私はできる限り、消費(する権利)を放棄する。エコロジカルな理想からではなく、享楽主義からそうするのである。生産と消費を分離するのではなく、今していることが直ちに生活に役立つ方が、人生がより満ち足りたものになるから』」
 - 19) これはラミスの「対抗発展(counter-development)」は禁欲主義でなく、本当の意味(消費による快樂主義でなく、本来の文化をつくる楽しみ)の快樂主義であるという主張に受け継がれている。
 - 20) 18)と同書、149頁。イリッチは「『商品の集約度』という言葉を使ってサブシステムと比較しようと試みました。社会における商品の集約度がある程度を越えると、持続性のある社会を破壊するようになります。これを避けるには、後退するより他にありません」として、「商品の集約」と「人間生活の自立と自存」を対比している。
 - 21) Ivan Illich "Tools for Conviviality", Calder Boyars, 1973 ここでは、ペンシルヴァニア州

立大学哲学科ウェブサイト中のイリッチ全テキスト・アーカイブから。

<http://philosophy.la.psu.edu/illich/tools/intro.html> p.48-73 (Accessed on Aug. 11, 2002) 邦訳は『コンヴィヴィアリティのための道具』日本エディタースクール出版部、1989年

- 22) 菊地昌典「書評『人類の希望』』『エコノミスト』毎日新聞社、1981年7月28日号
- 23) 井上輝子「イリイチ女性論への疑問」『婦人問題懇話会会報』1984年6月、40号、57頁
- 24) 宮寺卓「サブシステム志向の光と陰」2001年度日本平和学会春期研究大会・環境コミッション、2001年6月3日
- 25) イリッチは、(ヴァナキュラーな)ジェンダーが自然に具わっているものであるのに対して、性別役割分業は産業社会の構造そのものであるとしている。
- 26) 萩原弘子『解放への迷路—イヴァン・イリッチとはなにものか』インパクト出版会、1988年、74—75頁
- 27) 木下ユキエ「産業社会の女と男—シャドウワークの視角から—」『婦人問題懇話会会報』1984年6月、40号、62頁
- 28) 若井文恵「イリイチのジェンダー論のゆくえ」『婦人問題懇話会会報』1984年6月、40号、66頁
- 29) イヴァン・イリッチ、宇沢弘文対談「プラグを抜く」『世界』1981年4月号、149頁
- 30) 講演テキストは、『『平和』と『開発』を切り離せ』の邦訳に依拠した。
- 31) イヴァン・イリッチ、宇沢弘文対談「プラグを抜く」『世界』1981年4月号、157頁
- 32) 古瀬幸広・廣瀬克哉『インターネットが変える世界』岩波書店、1996年、6頁
- 33) Ivan Illich “*Tools for Conviviality*”, Calder Boyars, 1973 ここでは、ペンシルヴァニア州立大学哲学科ウェブサイト中のイリッチ全テキスト・アーカイブから。
<http://philosophy.la.psu.edu/illich/tools/intro.html> introduction xxiv (Accessed on Aug. 11, 2002)
- 34) 古瀬幸広・廣瀬克哉『インターネットが変える世界』岩波書店、1996年、7頁
- 35) 同上書、190頁
- 36) 同上書、201頁
- 37) 若井文恵「イリイチのジェンダー論のゆくえ」『婦人問題懇話会会報』1984年6月、40号、67頁
- 38) イヴァン・イリッチ、玉野井芳郎対談「現代産業文明への警告」『エコノミスト』1982年6月22日号、50頁
- 39) イヴァン・イリッチ、C・ダグラス・ラミス対談「イリイチ氏とは誰か」『世界』1987年3月号、205—206頁

〔参考文献一覧〕

欧文文献

- 1) Carl Mitcham, “*Ivan Illich web site*”, <http://philosophy.la.psu.edu/illich/index.html>, the Department of Philosophy of the Collge of the Liberal Arts at Pennsylvania State University, (Accessed on Aug. 11, 2002)
- 2) C. Douglas Lummis, “*Development is Anti-Democratic*”, ‘*Kasalinlan*’, University of the Philippines, Vol.6, No.3, 1st Quarter 1991

邦文文献

- 1) 山本哲士「イリイチ思想の新しい地平」『技術と人間』技術と人間社、1981年2月号

- 2) 郭洋春「冷戦構造の本質と世界経済」横山正樹・涌井秀行共編『ポスト冷戦とアジア』中央経済社、1996年
- 3) イヴァン・イリッチ、宇沢弘文対談「プラグを抜く」『世界』岩波書店、1981年4月号
- 4) 大西仁「平和研究に対する新しい課題」『朝日ジャーナル』朝日新聞社、1981年2月27日号
- 5) イヴァン・イリッチ『脱学校の社会』東京創元社、1977年
- 6) C・ダグラス・ラミス『経済成長がなければ私たちは豊かになれないのだろうか』平凡社、2000年
- 7) 菊地昌典「書評『人類の希望』」『エコノミスト』毎日新聞社、1981年7月28日号
- 8) 井上輝子「イリイチ女性論への疑問」『婦人問題懇話会会報』婦人問題懇話会、1984年6月、40号
- 9) 宮寺卓「サブシステム志向の光と陰」2001年度日本平和学会春期研究大会・環境コミッション、2001年6月3日
- 10) 萩原弘子『解放への迷路—イヴァン・イリッチとはなにか』インパクト出版会、1988年
- 11) 古瀬幸広・廣瀬克哉『インターネットが変える世界』岩波書店、1996年
- 12) イヴァン・イリッチ、玉野井芳郎対談「現代産業文明への警告」『エコノミスト』毎日新聞社、1982年6月22日号
- 13) イヴァン・イリッチ、C・ダグラス・ラミス対談「イリイチ氏とは誰か」『世界』岩波書店、1987年3月号

イヴァン・イリッチの脱「開発」の提起をいま一度考える —— コメント

開発の暴力性という論点を軸にイリッチの再評価を試みる意欲的な書評論文だ。

1973年時点での環境危機定式化や開発による「貧困の近代化」の体系的予見が「驚嘆に値する」との指摘(第3節末尾)に同意する。

当時はストックホルム国連人間環境会議、ローマクラブ報告、シューマッハーの『スモールイズビューティフル』など、環境的限界から経済成長志向の見直し気運が上昇していた。イリッチはドゥーデンやベールホフらとの対話や共同作業にもとづく「シャドワーク」論などを次々に発表した。

その後フェミニズム運動等から批判や反発を受け、80年代半ば以降ほとんど言及されなくなって久しい。これは「20年、30年早すぎた」(「おわりに」)からだけでなく、その衝撃性ゆえか、イリッチの思考を狭く孤立させた捉え方にも起因している。

時代的コンテキストやその思考過程の共同性を十分ふまえたイリッチ再評価のさらなる深化と平和研究への活用を期待する。

横 山 正 樹